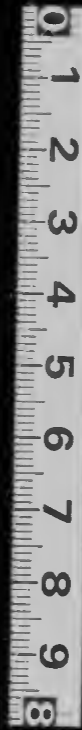


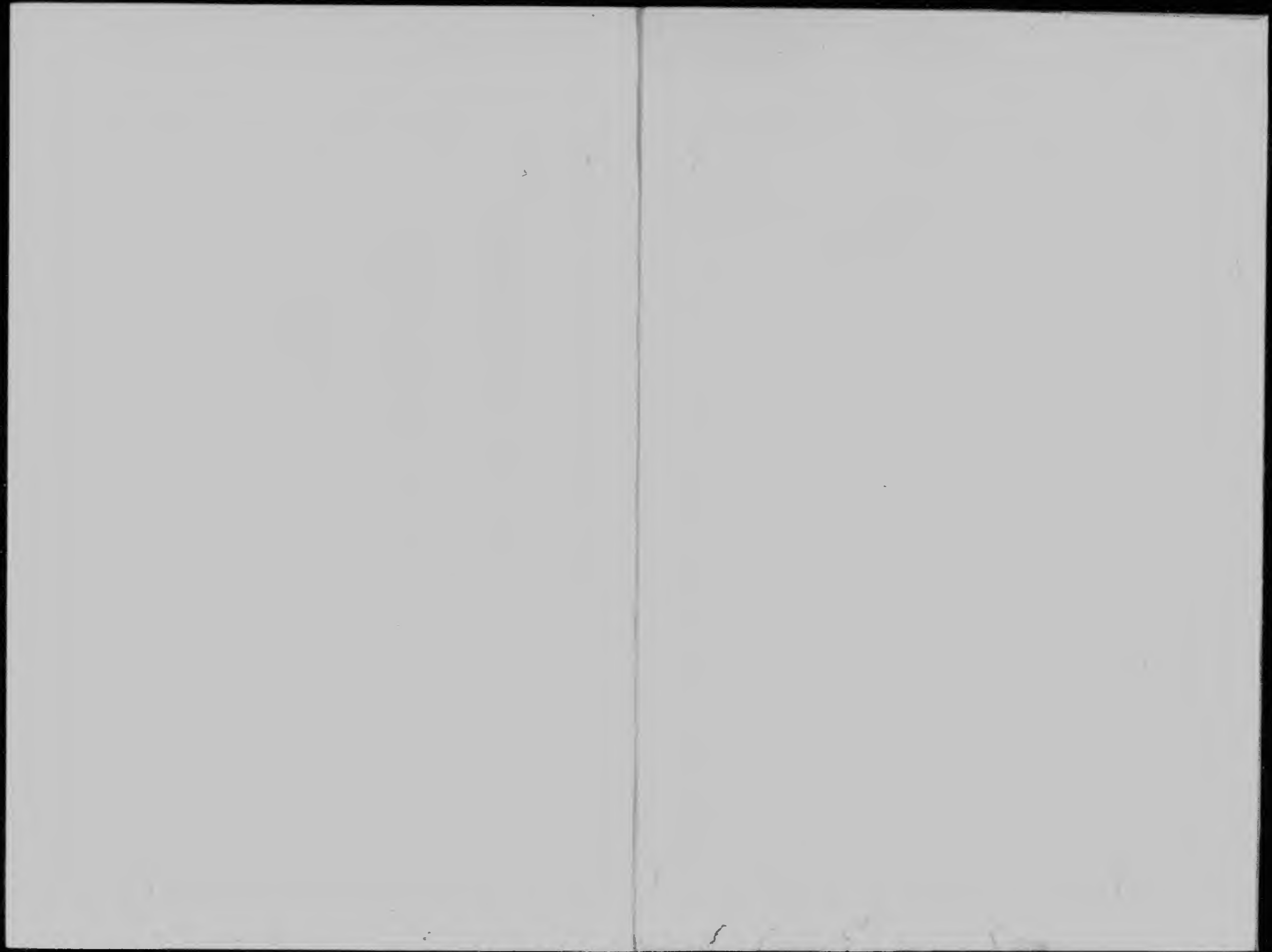
御小收組四番

二



庫	文	閣	内
五	三		和
二	二		書
函	五		
一	九		
二	九		
架	二		類

内閣文庫
番號和
冊數
函號



貞享四年卯年十二月九日

御中
御組
大之保
治
路
守
組

元組為書

古金忠次而利次二男

少當傳健南和米守組

三右衛門古金忠次在島利重

元禄八年壬午十二月廿二日群入大之保玄善守組

宝永三戌年八月十七日死字三景

元祿元年五月廿七日

左衛門尉忠重忠房

相向書

清小性坦太保澄路守組 吾若石川之帝直忠英

宝永五年三月廿日辭入太保澄路守組

宝永七年三月廿日自死之八家

元禄元年十月廿九日

佐倉の利隆惣代

桐間清重

御中在組之為保清治守組 岩手石 小浜佐倉昌隆

宝永六子年六月廿八日 沖松子

同年三月十八日 布衣志と免さし

同年四月廿六日 沖松息二百石元高岩

宝永六丑年九月廿日 清乃清殿へ

清々々々 沖松清後之事あり

明六日 百々々々 沖松と揚子

西徳元年三月廿二日 沖松天地

元禄二年六月十日
時辰三時

正徳二年二月十日死す

元禄二年六月十日

御中世祖大元孫

長谷川市郎長俊

後名

後名

御中世祖大元孫親良惣胤

同日父親良御側仕奉る勤勞
の功ありて後時ふりて百も
のむし御代り

元禄八年七月十日御中世祖大元孫
の三音儀か下奉る中因る御長世
二百儀と云

元禄八年七月十日御中世祖大元孫

よふて備

享保七癸卯年六月三日禱入音未経后脚ふ記

享保十午年七月九日死

元禄三年年二月廿六日

天和二年年七月廿二日曾

元禄十午年を別甲別の内お音乃
浄出世祖書及作十而但 文京三茶田中一茶右馬守忠理

三茶右馬守忠理

小菅信仙右因信守但

元禄十午年を別甲別の内お音乃
音地所用お音乃はそ純り其別音音純
のうらふく備

宝永元甲申年乃を又遠別甲別の内
音地お音音余所用お音乃はそ純り
其別比其都の内お音乃と備
宝永六壬午年十月廿三日諸國巡検使と

命を賜ひて同日方角の東海及びを巡視
すつと傳はりし明の宣年三月報陽服
黄令好時肢二羽威と傷の因八月報
陽くく陽留す

正徳二年六月二日死

元禄三年十月廿日

清を更重持貴子
桐と向陽表

山中世組者為化十弟組

于信 山田市希高満明
改作在書つ

元禄上宮年七月三日原米之儀と
弟地より一法り上野國の内より
下

元禄十三年四月三日本所深川の
西島政と急死す作有る

元禄十三年十月廿日死

元禄四年十二月二日

佛心性坦女夜出書手坦 言候 後書 二 強 爲 永 倫

強列清本奉行強助之永忠成

後書名

後内記
佛心性
出書者

元禄四年正月廿八日原書三言俵と揚

元禄四年正月廿九日一統乃由敷いして

今更中あとも揚

元禄四年七月九日佛心女書名是こと

の二言俵いして奉り申脚之帝久盼

女書名をいして

元禄十一年十一月廿五日官軍に召されて
去るは二日地震ありて崩れし所都門乃
石垣と修築あり奉召と命ありし
明の甲午十一月廿八日とくくそ切
外に事とわかれさせ給ひし言中
百とくくく言合と故時辰とを揚る

宝永二年二月廿日清徒既

同午十一月廿日西條の清徒既
同午十一月廿九日有言と先あり
宝永三年清徒既と誓つき作候
宝永七年四月十日清徒既
西徳四年十一月十七日未年日光

御神急御送命の清徒と命ありし
西徳四年三月廿日日光の清徒
作ありし作と誓つき清徒とあり
清徒送命の事と誓つき四月廿日
帰る清徒既

宝永元年申年七月廿日

將軍宣下乃清用と命ありし
宝永二年十一月廿三日肥前長門
川の長門豊前薩摩の沖(漂流)乃
是報とありし言合と故時辰とを揚る
ありし清徒既と誓つき作候
ありし清徒既と誓つき作候

一七歳夏迄迄絶つておろし中
つきの法しひのそまがうは八月法服
兼念樹何股二羽織と襦袢の首
十三方首法にて九列へあつて辛
抄事に切とふし何と事まう
法信書と奉法の者まは後定しで
享保四十年四月廿日法用と
勢一にようしとくしあま法信
襦袢の作す

享保九十年四月廿五日新法書
享保十一年七月九日大正法書

引渡法用と念まうし同二十日
法服兼念樹時股二羽織と襦袢
九月廿三日法用と法用

享保十二年四月廿日長福奉行
同年七月初日法服兼念樹時股二羽織と
襦袢の首法書作すれ改出さす

享保十二年四月廿日長福の
法用とくし何と事まうし
二言
扱と就る

享保十四年四月廿日長福奉行

元禄四年十二月二日

西使書控多事忠臣惣从

御出仕坦女及出仕守坦 云云依之田權而忠臣

元禄四年二月廿三日唐東三言依上揚

元禄四年二月廿三日御分 相向清書

同年二月廿三日書信入唐坂守坦

元禄七年二月廿三日御出仕坦守坦

元禄四年三月二日

河内世祖在安山寺守祖三夜所教誨而西親

河内世祖在河内郡刑部江馬河内世祖

元禄四年三月廿三日常米三夜在安山

元禄十四年七月廿六日郡公相之阿部表

日年三月廿四日小常米三夜在安山保

三夜在安山保

宝永元年甲午六月十一日元祖河内世祖

相年三月廿四日守祖阿部表

元禄四年三月廿日

神中住組長友松平傳十郎

子孫傳 忠貞

元禄四年三月廿日
原米三郎傳十郎
子孫傳

元禄六年十一月九日

河内性組酒井内記組

河内性組酒井内記組

音依丹羽權十郎長道

後の書名

改め丹羽
通守

元禄十五年三月廿二日を初者

元禄十五年九月十八日大津藩内記

元禄十五年二月七日を初者

元禄十五年四月廿三日大津藩内記

一統名をいふのこゝを初者

宝永七年二月廿一日を初者

を御之侍りて事徳の御心にて
御心御心にて事徳の御心にて
御心御心にて事徳の御心にて

西徳四年二月三日を御心にて
事徳の御心にて事徳の御心にて

事徳の御心にて事徳の御心にて
事徳の御心にて事徳の御心にて
事徳の御心にて事徳の御心にて

享保八年六月六日使書

八月十八日布衣志とるまに

享保九年六月十日之御心にて
七月廿八日御心志とるまに

己の御心にて事徳の御心にて

享保十三年九月十三日南越御心
御心御心にて事徳の御心にて

其日御心にて事徳の御心にて
しひの御心にて事徳の御心にて

別の御心にて事徳の御心にて
二夜中御心にて事徳の御心にて

とて事徳の御心にて事徳の御心にて
とて事徳の御心にて事徳の御心にて

付御心にて事徳の御心にて

享保十二年十月八日御心にて
元文四年四月御心にて事徳の御心にて

日永三月十六日新野町近江守と改
延享二意年四月細智中田守格年参

日永六月十八日

養仙院君がくれを治ひ〜かゝるの
法送りの事〜川湯進福の事を
誓ひきよ〜作者七月十三日
芳名〜とて何故と云傷。

寛延元在年二月廿五日

將軍家乃御母君のれを〜い
〜川湯の事〜川湯送りの進福
の事〜とて何故と云傷
三月廿五日〜事〜に〜め〜と

〜何故と云傷〜

宝曆元在年二月廿五日年七十八年

元禄六年十一月九日

河小性祖酒并内記祖

桐園傳書祖以又而則英卷子

三原遠山江左而則照

後八百名

元禄七年十一月廿九日原米三原儀と
備

一四徳巳年十一月廿七日家智八百名
是との三原儀と一奉

享保二酉年十一月二日禰入村木月陽也祖

享保四酉年十一月二日為書為三原也死

享保七酉年二月曾死

元禄六年辛三月九日

河内性組酒井内紀組

大津青組及大津赤組同忠義奉
言後大津保三之助忠勝
改名于市

元禄七年辛四月廿五日高木三吉傳之儀
其後文字乃同如左の如く之れを叙むと
也

元禄年中辛傳上納御番河内守家康之儀
其後文字並勝方下左如左

元禄七年辛四月廿五日

元禄六年八月九日

市川性組酒井内記組

三原 治末 三税 重忠

改治在馬

市川性組酒井内記組 三原 治末 三税 重忠

元禄七年八月廿九日 市川性組酒井内記組

三原

元禄七年八月廿九日 市川性組酒井内記組

三原 治末 三税 重忠

三原 治末 三税 重忠

元禄八年八月廿九日 市川性組酒井内記組

三原 治末 三税 重忠

元禄六年辛二月九日

清小性但酒井内記但

中書記者本係空海但控領所志願也

三保大久保宗右衛門忠興

海老名

政彦

元禄七年辛四月廿五日原宗三郎傳七揚人

宝永四年辛二月廿八日部入三枝揚傳守但

西德元年辛十月廿六日海目守名号

との三言俵也一奉。

西德二年辛三月九日清小性但松平伊海守但

元禄七年辛巳正月九日

赤松恒祖酒井玄成守祖

恒祖
酒井玄成守祖
三信
注七
注八

宝永二年七月晦日跡目七右衛門

まゝの三右衛門下奉る

西徳元年三月廿九日跡目

曰年十二月廿一日有長忠と名入り
西徳四年三月廿八日跡目
享保三年七月朔日跡目
享保十三年八月廿日死

元禄八年六月朔

曾文十氏 年七月三日 跡目
元禄七年 年九月十八日 桐向由友

公孫馬門 二高 養子
桐向由友

赤川性祖 酒井 孝及 守祖 孝若 加茂 勝 孝清 孝及

享保六年六月廿十とせう間

名表にありおきとて多 宣中にて

きて 赤川性祖 孝若 孝清 孝及 孝清 孝及

享保十六年三月十一日 死 七才 家

元禄八年九月某日

天和三年七月廿九日

長門守忠依忠
桐之向中書

御出性酒并之政守道 寄後鳥居織部忠立

始官内

元禄十二年七月廿日

下野國のうらみく

西徳の事年四月十日

日年十二月十八日

享保十三年十月廿日

元禄九子 辛七月廿

貞享四年 辛七月廿

官務録部 重政書子

小倉藩 幸多内守但

元禄九子 辛七月廿

元禄十三年 辛十月廿日 大津藩 藩目守上
兼小倉藩 守上

元禄十三年 辛十月廿三日 津 侵者

同年三月廿六日 実父 本多全左衛門
時令 嚴刑 日 交 出 色 海 紀 記 記
津 領 へ 向 へ 一 町 也

同年三月廿五日 津 役 上 名 守 上

高合の列寸

山徳二在辛卯月廿五日死

時常の嗣子新七郎重供父の
き高保元申年三月狂疾おこ
矢くめしそ家此之より石と
大集もれて家絶つる

元禄九子年七月廿日

國書印年七月廿日

山徳廻酒井と改守道 千石 久保長平而忠音

宝永四子年八月廿二日

日年十二月十九日布衣忠と名をれ

宝永五子年六月廿日大田源四子

仲とと合せし日八月廿日

美全と揚明の長年二月廿日

帰く活徳子

山徳二在辛卯月廿日

元文元年四月六日死年二歳

元禄九年七月廿日

延宝元年七月廿日

元禄九年七月廿日

延宝元年七月廿日

元禄九年七月廿日

延宝元年七月廿日

元禄九年七月廿日

延宝元年七月廿日

元禄九年七月廿日

延宝元年七月廿日

元禄九年七月廿日

享保十六年三月廿日死年六

元禄九年十二月十一日

沖中世祖酒井吉政守祖三喜後酒田九喜隆政

改左馬

酒田九喜の忠政治由り
沖中世祖酒田九喜の理由也

同日酒田九喜隆政と流る

隆政は吉田の
父忠政嗣子
丹波守利由父より高橋あるに對任の料として
流るるに二子石と返りて吉田の係りありし思召
吉田男として召寄りて忠政の老とありし先
らも是れ獨恩のゆゑに流るるは一日は理由の勅書
よりてり

享保七年二月十日とて同而也

よりの誓ひ書はして其令校と流る

享保九年十月廿八日少右河内守吉政

少くも居部之地と云ふ

享保十七年九月五日

養仙院様御用入

口奉三月十八日布衣若と免と也

元文四年三月廿九日免七十七家

元禄十五年三月十八日

元禄六年七月二十日疏目

又四節勝西巻紙

山崎奉行山崎書房守道

御水姓組酒井幸政守組 于重三洲経巻勅水云

宝永二年四月九日強列田里城行度

法用と合書事 月 日 法服並合

三 故と終る 一月朔日油と洋揚子

宝永四年二月廿日御用事

口奉三月十九日布衣若と免と也

西徳二年三月廿日御用事

享保四年九月廿日免

元禄十五年三月十八日

元禄元年七月十二日

清原勝英

小菅信中

伊弉祖酒井重政守組 喜右 山南友房 經呈

享保六年六月廿七日

元祿十五年二月十八日

元祿二十二年七月十日

友九市貞輝養子

出雲守北条房守組

河津組酒井玄政守組 三原織田權十郎長高

元祿十二年九月五日

元祿十四年二月九日

水野長門守組

宝永元年六月五日

松平玄政守組

元禄十五年十二月二日

元禄十六年三月五日

元禄十七年三月七日

仙石長常寺政春養子

沖山酒

沖山性組酒井伴博守組 三依仙石丸門改義

西德元卯年八月廿九日死三子八案

元祿十二年八月十八日

元祿十二年七月五日分知

彦坂寺住持重紹啓

小菅信右衛門主善次組

御出仕組酒井住持守組 吉原 山田三平又真安周

後任重啓

真周丑年八月廿六日山田三平又真安周

元祿十二年二月廿八日涉汽院

日年三月廿五日布衣志之老(寺)

元祿十二年十月廿日南町前山石

左馬前川村又十郎より上り地(寺)

宝永元年十月九日

仙洞寺別院法如恩書石九千二百石

宝永二百年四月廿八日沙服差令取
付服之相藏と云

宝永二百年二月二日高部町之教所
之作出任直守と改

宝永二百年七月廿日高部町之
洋宿一保之代と改

宝永二百年四月廿日沙服差令取
付服之相藏と云

宝永二百年七月廿日高部町之
洋宿一保之代と改

宝永二百年二月廿日沙服差令取
付服之相藏と云

宝永二百年二月廿日高部町之
洋宿一保之代と改

宝永二百年四月廿日沙服差令取付服之
相藏と云

宝永二百年七月廿日高部町之
洋宿一保之代と改

宝永二百年三月廿日高部町之
洋宿一保之代と改

宝永二百年八月廿九日高部町之
洋宿一保之代と改

元祿十一年八月十八日

元祿七年七月五日

菅沼三右衛門政利

菅沼松平三平

菅沼酒井信繁守組 菅沼菅沼三右衛門政利

改 守組 三右衛門

享保十一年三月在日中令其將乃
時歩幼母子と免

享保十四年四月九日移入小出伊織文記

延享元年八月三日致仕政体と云

延享四年十月四日死年六十一

元禄十一年八月十八日

自高子元子年七月廿三日

孫右馬守忠公書

出高信忠部丹波守也

清水性祖酒井信勝守也 三景名若林賴母出重

正徳三年六月廿九日辭入松永信長守也

高保田重幸年付日可為安藤之膳之記

享保八年九月廿日死里之末

元禄十二年八月廿一日

左平左光俊惣所

浦中御所

御出陣之由任是守組 吉右 山口右左衛門光冬

享保七年二月廿一日宿願十とをう回

上より乃移り給ひてて甚合二 坂之場子

享保十巳年七月廿一日辞入能勢出守守之死

享保十八年七月十八日死

宝永元申年六月十日

左様上六未年三月廿三日

河小性組松平左政守組

左様右 神尾常清元連

改市江馬

宝永四亥年十二月十日西九河徒取

日年月月廿三日布衣志上多子礼

宝永六丑年九月廿日群多合

西徳之元年六月晦日无子七条

宝永元申年六月廿日

新左衛門安則忠胤

山崎信通後傳中守組

所小佐組松平左近守組藩表子喜右小川新九郎保願

正徳元年辛巳月廿日申上少く右の清鏡

乃射り刻一頁廿日百五乃々黄令

如之湯也

正徳二年辛酉月廿日拜入松平伊重守組

享保二年辛酉八月二日死七十七歳

室永元申年二月十日

元禄十三年八月十日

酒田与左衛門

出羽守

酒田与左衛門

享保四年八月十日

享保十三年二月十日

の部

享保十九年三月十日

享保二十一年九月十日

宝永元申年六月十日

刑部左衛門正八郎

中納言信之丞保之丞善兵衛

河内性祖松平左近守祖中納言三左衛門阿部孫十郎正親

後之者

宝永元申年三月二日家督之御名

是との三右衛門父之老也昔は料子湯

享保九年十月五日拜入任丹波守家門正親

享保十二年三月廿六日致仕

享保十六年三月廿日死

宝永元甲申年六月十日

后九帝自輝養子

小菅信弟保固防守組

清光組松平左近守組

三景依織田信十而長高

寶永元年六月廿日老釋賜美全二入公為年帝死

宝曆元年庚申九月廿日死公家本

宝永四年正月十八日

宝永四年正月十八日

大橋平清親作

小菅信松平三平

大橋平清親作
大橋平清親作

宝永七年二月九日死

宝永四十年正月十八日

宝永二十年三月廿九日

淡井一之丞以壽春子

出雲守松平之少将

河内性組松平之政守組之若淡井藤元改典

改主殿

吾在馬

享保十年三月廿七日

隨ひまゝ一之丞を宛り免在旨

藤元を賜ふ

享保二十年八月八日死年七歳

宝永四年六月八日

宝永三年六月九日知

御中世組松年三喜收中組 吉名 系後 至水高林

後 内 勅 勅 一 字

三林六実ハ系後母信者之國

四男ありて一は一り父之事有

時豫別言和清正死をきき居

免をきき一は一り父の許ひしありて

多知お名を記す多西中世組別守

享保六年六月十日十七日同

為出方なりてしとて美全校と記す

古事記十三年十月廿八日死す

宝永四年十月十八日

名孫上宮年十月廿八日曾

源氏内利政曾孫

出雲信三枝孫曾孫

御出祖祖平之政守祖 吾名本末の系利記

宝曆九年十月廿七日山吹のるよ

百三十三お顔とをさし宿屋に

方々あつとの作とあつ明の目録全

故と揚る

宝曆三年十月廿七日死す

宝永四年十月十八日

元禄九年十月十日

御世祖松平素直守祖 三喜名 作之 又七而成意

内市儀

後深江

元文二年四月四日

作之

元文二年十月六日

日辛卯月十六日

寛保二年十月七日

あまのりく 防境終極の清國と命

ちしき日月十日

二と云ふ頃のまふ年宜月宜留て
淨福一日月三三能夜川の神
芳りしとて美合と好と云ふ

延喜元年三月廿七日依後奉行

延喜二年四月朔日淨眼美合と
好と云ふ

延喜三年三月廿七日淨福一

延喜四年三月廿七日淨福一

延喜五年三月廿七日淨福一

延喜六年三月廿七日淨福一

延喜七年三月廿七日淨福一

宝永四年三月十八日

元禄四年三月廿七日

法皇の幸信養子

出雲信之貞因信守組

浄心性組松平左衛門守組

三景花房守常乃幸貞

一山徳三己年六月十八日死二十八歳

宝永四亥年十月十八日

宝曆二酉年四月晦日

喜多布定吉養子

少輔信之貞因情守組

河内性組松平左近守組 三信 山角小三信定喜

政之胎

正徳二亥年十月八日釋入大膳肥前守組

享保四亥年八月二日為沼井大守子死

享保七亥年九月三日刻令南園信吉死

延享三亥年三月廿日致仕

宝曆三年九月廿日死七十七歳

宝永四年三月二日

元禄元年三月十日

御小姓組松平重政守御

三喜右衛門守貞

村上三右衛門重春三男

西尾桐之助重友

享保五年三月五日

室永あ子年十二月廿日

室永あ子年四月廿九日

室永あ子年

室永あ子年

清小性組松平去政守組 九番名 大保河次而忠記

延享二五年四月 日祥入古屋平三希子記

日永三月廿日 教任又甫とらふ

寛延元年三月廿日 死平三希子

宝永六子年三月廿日

宝永六子年四月十二日

信長子 重信 養子

多合

御出陣組松平左近守組 吉右衛門 大橋助六郎重信

山徳元子 幸四郎 廿六日 出陣 吉右衛門 的

清後方より 廿六日 出陣 吉右衛門 的

黄令 廿六日 出陣 吉右衛門 的

享保九年 二月廿六日 死 吉右衛門 的

宝永六子年十二月廿日

宝永六子年八月三日

又左馬仲祐惣所

小菅信松平主事改組

赤小性組松平主事改組

三喜若曾我平常長祐

後丹波守

正徳二子年二月廿日法使番

日年七月廿日三列新設後引後

赤用と命とて八月廿日法使

美令と命とて八月廿日法使

洋福をいひしきよ

將軍家薨へ法いひしきよ

そり〜〜〜止方

同年三月十日有衣冠と云々

西徳元中辛酉月五日松平康勝

知けり其後分估米國等山

國由國有之て其さき政を議して

其さきより休首三月七日湯服

黄令板と爲り十月十日有歸り

享保元中辛酉七月十八日諸國巡検使

と云々其日五日奥別松本と

巡視して其さきより休首咽れ

西辛酉月廿日湯服黄令板時服之

羽織と爲り十月十日有歸り

享保二辛酉九月十日水府乃

黄門細條師遊芸一法六紀別へ

湯便と云々其日湯服黄令

板時服之と爲り紀の若山其さき

湯便と爲り其日

享保二辛酉九月廿日信別波合

乃湯園所換方湯用と云々其日

十月十日湯服黄令板時服之と爲り

其日湯と爲り

享保八辛酉二月十日新湯番代

同辛酉七月廿日日光の靈泉金倉代

系使と云々其日湯と爲り

享保九辛酉二月十日

若君の傍方へ屬せしむ

享保十二年八月廿八日少宮信親等死

享保十二年七月十二日甲府勤王等死

同年九月初日河原美令之村殿三郎と

後、付旨親身作らるるに丹波守と改

享保十二年九月九日卒年六十一

宝永あり年三月廿日

元禄十二年三月九日

彦彦帝明時養子

少宮信之孫信隆等組

河内性組松平主政守組 宮若 朝岡 敏 廣 方 喬

山徳四年二月二日中興御書

山徳五年二月五日御書

同年三月廿八日御書

享保十八年九月廿日御書

同年十月三日御書

御書

享保十九年四月八日御書

元文元年六月廿五日
元文元年七月廿七日
元文二年四月廿日

延享元年二月廿日
宝曆元年八月廿九日

宝永元年三月廿日
宝永元年六月廿日

宝永元年三月廿日
宝永元年六月廿日
宝永元年六月廿日
宝永元年六月廿日
宝永元年六月廿日

元文元年二月廿日
元文元年六月廿日

宝永元年三月廿日

宝永元年三月廿日

宝永六五年二月廿日

宝永二年十月十日被京師

多我伊藤年祐志忠臣

伊藤代津中納言

沖小姓組松平左近守組

音信曾我織部助賢

後公名

後七三信

山徳曰乎年三月七日在智八右名是との

之百俵八父の老と書し料主給る

享保元年七月分諸國巡検使と

命をさし同日廿日畿内と巡る(ま)

仰有る九月相習法服着令討腹二

腹藏と稱し明のる年二月廿八日湯で

淨備す

享保三戌年四月廿八日

日本国十月廿日之田乃金之鶴の
法将のしつとふふに惣子と惣ら
日月古言惣子の惣一古言古直
さう、惣子に言ふは、何故と爲る

日本十月廿八日布衣と云ふ事

享保七年四月廿七日元相公御守
かの郵法用をさうと云ふ事
そやうして、山向法慶橋橋匠和等
う執事、他の内七番伴と爲る、合字
と云ふ事

享保十三年九月廿日未年日光

法休と云ふ事、色明の申奉、官書
旅帳の料、白紙、百と爲る、四月
日、さう、法休、日、光

享保十八年四月廿日法先地
元文三年四月廿八日新法書
寛保二年四月廿七日死事、八家

宝永六年四月廿日

御中世祖松平重政守道三君後 水野平十郎年満

後千四百石

後千石奉給水野平十郎守養惣所

日永四月廿三日高松三石俵と御

今年八百石俵と給ふ御と奉給

享保八年三月廿十日之間高松

上の勢好きとて黄令一様と給

享保十二年三月廿日小令出符の時

高松勢好きとつと給

享保十二年三月廿九日高松勢好き

是との三首偈ハ返一奉
寛保二戌年八月二日死去三案

宝永六丑年四月六日

佛小姓組松平左波守組 三首偈如く仇救馬忠意

後千石

此先地頭松平右馬守信全忠成

日永四月廿二日原系三首偈と揚

とく八百石俵とありの作あり

山徳四十年四月廿二日海月寺名是との

三首偈返一奉

山徳六丑年七月七日禪入寺名保徳路守組

寛保四十年八月二日名瀧川隆成也

とあり

元文四年七月二日死年三十一

宝永六年四月六日

御中性組松平左衛門守組

三番信長 長崎前之松元喜

御前守松平元仲忠胤

後之松元

後之松元

同前四月五日原三番信長編り今年八

百三信と編りお作り

寛保四年七月七日御前守松元

との三番信長返り奉る

延享四年七月八日死年三十一

宝永六五年四月廿日

大徳元節
仲世組松平を改守組ニ言候多由彦高而積縁

同奉日月廿日彦高来ニ言候と候
今年八月廿日彦高と申すの仰り
西徳元節年四月廿日大徳元節の村
ふに列して六月廿日彦高に言候て
美令候と候
彦高七言年二月廿日十とをり同者
也と一の物候とて美令候と候

享保九年七月七日 御金 死 甲子 三 果

享保六年四月六日

御小姓組松平左衛門組 音儀 新見 主税 殿

左衛門組新見忠左衛門 隆屋 殿

同年月廿五日 原米 三音 儀 御

今年八月 原米 儀 御 御 御

享保六年六月 音 御 御 御 御

同 御 御 御 御 御 御 御

享保十七年三月十日 御金 死 甲子 一 果

宝永六年四月六日

御出仕組松平左近守組

御書院若菜野中守組御系信廣英養子

三信儀川勝助御廣造

後主名

同年月日三日前來百重儀と仰る

申奉る三信儀と仰るの御所也

享保八年十月廿六日御目立名

是との三信儀より一奉る

宝曆四年二月廿日老穉揚美念入御目立信廣

宝曆四年二月廿六日死七十三歳

宝永六年四月六日

河内性祖松平之波守祖三音儀大河原中御光良

河内性祖松平之波守祖三音儀大河原中御光良

河内性祖松平之波守祖三音儀大河原中御光良

日年月日其言こと一八原系百重儀と
揚り其年より三音儀と揚り乃
作り

享保五年十月十六日文老如是
あふ下の神は一八原系百重儀と

寛延元年二月廿九日死

宝永六年四月六日

所出性組松平左政守組

中書院若菜和信等通事信實忠成

三音依 依田之税信安

後子三音名

注内免物

日年月日音旨原米三音依と揚。

一〇〇〇〇〇音依と揚乃作あり

西徳之己年八月九日海月三子三音名是なり

三音依也一奉。

享保十三年二月二日死

宝永六五年四月六日

御中 松平主政守組 三原守直守組 吉原守定輝

御書院 若狭守 守組 守直 守定 守輝 御

同 年 四 月 六 日 御 書 院 若 狭 守 守 組 守 直 守 定 守 輝

今 年 八 月 守 直 守 定 守 輝 御 書 院 若 狭 守 守 組 守 直 守 定 守 輝

享 保 二 年 三 月 二 日 御 書 院 若 狭 守 守 組 守 直 守 定 守 輝

享 保 四 年 八 月 二 日 御 書 院 若 狭 守 守 組 守 直 守 定 守 輝

享 保 九 年 四 月 二 日 御 書 院 若 狭 守 守 組 守 直 守 定 守 輝

宝永六年四月六日

御中 松平定直 御前 松平又次郎光忠

御書院 若狭守 松平定直 御前 松平又次郎光忠

口年四月廿五日 高家三景儀上賜

今年八百五十七年 御前 松平又次郎光忠

享保七年三月廿日 御前 松平又次郎光忠

宝永六五年四月六日

御小姓組松平左近守組

沖書院表本末國情守組表名種井養子

旨依 永田左之丞種芳

後正高守石 後正高守

西徳二夜辛卯月之日奉智七百守石

今との旨依一奉

享保四五年二月廿九日稱入大久保澄治守組

享保四五年八月二日存石川之庫支配

享保九年十月九日御小姓組全田用守組

宝永六五年四月六日

清中世祖松平幸及守祖 三景依丹羽宗女改和

改主祝

宝曆元年十月十日 柳生佐若守に被預

改和母方の佐才遠極村を言ふ事子

よりく勝飛ゆきをくすりく乃

くく柳生佐若守に被預く事子

日息男万太郎に父八祖父正道の兼祖

よりくきより被預く

宝曆二年八月廿四日 宗女改和

涉部伊左衛門
宝曆七年十月十七日死年三十一

宝永六年四月六日

涉部虎若永井佑重通相模守直秀
涉部性祖松平三左衛門 三左衛門 直久

正徳六年二月九日 任 死 年 三十一

宝永六年四月六日

御小姓組松平を波舟組 三浦依油川万右衛門信房

御書院若松浦山三浦依油川万右衛門信房

後書院若

改派三浦
三浦七郎平後
武田氏

日辛巳月廿五日酉時未三浦依油と揚

とて三浦依油と揚を此所へ行

高保七郎平十月廿五日又同日取

とて御苗武田を懐す御書院若松浦
合をなす

高保八郎平三月廿日横河三丁目

横河の部敷ありかきりし明の夜事

二月五日壬午の御
享保十一年三月某日
是の三首偈返一奉

宝曆三年四月廿一日

宝永六年四月廿一日

浄土蓮組松平之政守組 三首偈 伊織忠勝

後三首 政守而

日辛巳月廿二日
今年六月廿一日
享保七年六月廿一日
是の三首偈返一奉

享保九年九月廿九日

正徳三己年三月十九日

檀原島志澳熱風

澤妻 小菅信太郎肥後守組

清小性組松平信勢守組 吉右 大内保彦彦忠貞

寛保元年 辛酉六月廿日老稱賜美金廿八兩并監物支取

延享元年 辛酉二月朔日老稱の下此部

自中少く難夫と有るハ二ノを云ふ

す一ノと作出さるる九日免され

宝曆元年 辛酉二月四日死 中少

正徳二己年六月十八日

元禄三年三月三日松平定房

兩儀十三年正月

桐一阿比留

河小姓組松平修徳守組 寄名兩宮源六山武

享保元年正月十日入松平修徳守組

享保四年正月十日為酒井大守

享保十六年九月十九日田中宗之助

享保十八年六月十日

寛延二年八月四日

享保元年八月四日

正徳三年六月十八日

宝永四年十月至日

井後平田忠孝の巻子

清小姓組松平侍格守組

之極田番

相・向清長

皆依井後平三帝忠亮

享保十七年六月廿八日中人記

曰年三月十六日布衣志と名をす

享保二十二年十月五日西城の清田守

名文田守 年四月朔日清先施既

寛延三年八月廿日死七十五歳

正徳三年二月八日

岡九郎兵衛西親惣辰

元禄三年七月廿一日於横田藩

相向藩

中津祖松平信俊守廻 三景保岡儀吉又正安

享保三年二月廿日於大津藩の時

延保馬とのと光

元文六年二月廿日老將楊美奈入吉忠忠郎と死

同七年七月廿八日死七十一歳

正徳二年六月十八日

宝永

未月 日 辰 丑

天英院様老女佐山為春喜

桐 向 清 斎

佛小世祖松葉信縁守祖 三音依 兎玉主馬也心

也心公実公邊衛等仕入その後老女

佐山の春喜子(好)あり先西條乃

焼火乃留清也より辰辰又桐叶

乃清善よりす久々小清也世祖也

ら

享保十八丑年七月廿六日死守六葉

享保三十二年三月十六日

享保三十二年三月廿七日

河内性祖仙居若狭守組

小笠原内友方之助 改修物

河内性祖仙居

小笠原内友方守組

享保三十二年三月廿九日下野國高田城引

渡津用と合巻と進二日十五日

美令と編と編三月廿三日

細目洋揚子

宝曆三十二年三月廿九日光輝揚美令と編入川勝権助亮

明和七年三月廿二日致仕

同奉三月廿七日致仕と云

安永七戌年閏七月四日死九十九歳

享保三戌年二月十六日

區部治明 養子

原妻 小菅信 中川 信隆 守組

清小信組 酒宿 若狭守組 菅名 大田 織部 英資

享保三戌年二月廿一日 小菅信 入道 寒村 周防 守組

世目 小菅 依信 守 常春 朝臣 乃 郎 一 百

ふれて 去 元 禄 十 七 年 小 菅 信 入 道 一 百 一 十 五

の 事 有 小 菅 信 入 道 一 百 一 十 五 十 一 十 五

十 事 十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五

十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五

十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五 十 一 十 五

通塞作分々此作は傳へてきり
日永三月廿七日通塞とある
享保四十年分月二日為任丹差信實
享保十三年分月二日致仕整りて
静坐しり
宝曆元年分月廿日自死七十八歳

享保三年三月十六日

西徳之元年四月廿日家智

清小性組御傍若狭守組

基信信常忠氏
小菅信松前住守組
三景依小栗丸信信
政内也

寛保元年六月廿日老稱揚英金三人河部信徳支記

延享元年八月十六日死七十八歳

享保四亥年十月十八日

享保二酉年十月廿六日

御小性胆酒宿若狭守組

三喜岩 堀宮内利庸

後 伊豫守 伊豆守 伊豆守

後 堀宮内利庸

三喜岩 堀宮内利庸

享保五年七月朔日

令書しき付申有法眼美令と揚り

明の酉年三月十八日

台形と守

享保十二年十月廿日

日年三月十八日

元文四未年四月十日御先施取
延享三未年四月廿日山田奉行
口年八月廿日御先施取御先施取
叙受御先施取也改任其守

宝曆元未年七月廿六日御先施取

宝曆二未年四月廿五日御先施取

うし祖を御先施取の御先施取に
を事とせしめ御先施取の御先施取に
御先施取の御先施取に御先施取に
御先施取の御先施取に御先施取に

明和四未年七月十二日御先施取

享保四未年十月廿八日

宝永二未年二月十九日御先施取

御先施取御先施取御先施取
二名 大御先施取御先施取

享保二未年六月八日御先施取御先施取
命とせし七月廿日御先施取御先施取
明の未年三月廿八日御先施取御先施取

寛延元未年四月十日御先施取

日年六月九日御先施取御先施取
大御先施取御先施取
御先施取御先施取御先施取御先施取

弟の三郎首てその中へ入ると
十日歸十三日洋備す廿日自光乃
急使と勢しつてつて其令と
故と備す

宝曆丙午年四月七日死年三十一

享保己亥年十月十日

享保元申年十月廿日

河内性廻宿務候守組 子九郎 大久保其五而忠隆

伊予守忠家忠隆

小笠原信組永井宮内守

享保壬午年十月廿八日死年七十一

享保四十年十月十八日

平徳二辰年八月廿日

御小姓組御宿者後守組

千石上奈田中一高右衛門勝芳

後出願等

一高右衛門勝理養子

小菅信組御宿者後守組

享保十一年三月廿日小倉藩將のとき
勢多とのとき

元文四十年二月三日御小姓組より

旧年十月十六日布衣志とある

寛保二辰年六月廿日

禁裏附

旧年九月廿日浦服美令お付殿に

羽織と傷

以年上系して叙身作らるる出羽之成
實は延元元年四月廿五日乙未の事
相傳へ獲代とあり七月朔日所服
其令取河版之時感と傷と又上系
して誓ひ

宝曆元年七月廿日小菅陸奥死

宝曆三年七月廿日

刑部卿宗尹至乃家老と補と

宝曆十二年六月武別比止部

乃右右衛門外少将と補と

日國大宰府男倉郡のうらわて

主代と傷

明和五年七月十六日卒七十五歳

享保四十年十月十八日

宝永七年八月廿三日

平左衛門重白

小室信恒全田園防弁文記

佛小信恒源若狭守組 若狭守 園井平左衛門 忠直

享保二十年三月廿七日 中令 涉将乃

とま(勢子)とつと先

享保二十一年九月十六日 大前 六平 村

涉後 村 列 一 皆 申 上 色 六

涉 前 日 百 五 十 七 日 時 辰 三 十 揚 子

享保十八年九月廿二日 死 三 十 九 家 本

享保四十六年十月十八日

享保四十六年十月十八日

御代組御宿若狭守組

中津藩御宿若狭守組
山崎信重後及之膳支死
岩 飯塚三郎達連
後中津藩

享保十七年二月廿日青山の古殿迄

焼くて市ヶ谷の宅敷より入

元文五申年十月廿日死申七采

享保四十六年十月十八日

宝永三十九年十月二十日

右方在信通勝越所

出書信但永井官内之記

御小姓組御宿若狭守組

三音右

天方庄之助通富

内中係

改基之馬

享保四十年祥入永井官内之記

享保四十年十月二十日

享保四十年十月八日

宝永二年十一月七日

中津屋組御傍若狭守組

由寄儀

不川頼母高房

不川守左衛門清吉

中津屋組御傍若狭守組

享保十年十一月廿七日

奉行惣奉行

宝曆七年十一月廿七日

寛保四年十月十八日

寛保元年十月廿五日

沖津組酒房長後守組

三浦 徳海 徳部 頼高

長久保 頼有 春子

小栗 信組 伊丹 元 佐 長 守 記

寛保二年九月廿日

養女 出妻 出妻 出妻 信 何 入 長 前 次 高 記

日向板倉佐渡守勝清羽后之部高元

貴女三田政之丞女雛相院事去二月

家出を以て全き以て任不と尋ねし

日政之丞の伯父三田小清を以て全き以て

任不すしきと尋ねしに及ぶ迄

志事成りし事九月去辛十月奉出

きしにき事とそことつていふに後肯
公法とていふし不當の至るは善石
放されし善石傳日くまじいんましとて
存しき傳り

日辛丑年七月廿日安門と名する

寛延二年四月三日のころ

年始の淨堂と出待す

宝曆十三年六月廿九日死去八歳

享保九年七月廿一日

新清善院印記永倫惠从

浄土性祖金田國陽守祖 三音依後善内記久琛

後あり名

改強信
印記

享保十一年二月廿日太全清持の
と記強信とつとむ

享保十二年八月廿日首師月あり名

是との三百像とてせむ

延享二年四月廿日死年六歳

享保九年十月九日

西徳元禄年八月晦日

酒井内膳助忠吉書子
奉合

清水姓組全田周防守組三右衛門酒井主水忠之

政内膳助

享保十一年三月某日小倉藩將の所

遊騎馬とつて心

寛保三年七月十日官目拜奉合

宝暦三年四月十日山口の藩書

と勢つき作と奉書

宝暦四年八月七日死守九家

享保九年十一月九日

元禄十二年七月九日

津波組全田周防陣組 千原右衛門主馬忠古

改正

元田多摩忠義

享保十年三月五日

領

享保七年三月十二日
引渡津用之令書
其令と云
宝曆二年三月十日
有て改易

宝曆三年 月 日 死

后(一)子(一)福(一)子(一)孝(一)子(一)

忠古の嗣子主馬の跡をとりて
登城善祖として嗣子多事
又 継て后知(一)子(一)孝(一)子(一)
と(一)子(一)孝(一)子(一)

享保九辰年十月九日

享保九辰年三月廿四日

源左衛門忠常養子

多合

伊予性組合田周防守組

子言子
之右余

黒田源太郎忠方

改源左衛門

享保十辰年三月朔日 山中納戸

口年四月廿八日 布衣志と云ふ事

享保十辰年四月廿九日 日光の法住持

享保十辰年五月十日 取乃

神田内郡下流井宿番守の地

延享二年九月廿五日 西條へ

寛文元年正月廿五日 群多合子列す

寛延三年四月廿日致仕を轉三右衛門
宝曆十三年九月廿日薨御して西の方と云
天明己未三月十八日死に由來

享保九年十月九日

西征三年九月十二日薨

御中世祖金田國房守祖

高橋元連忠子
出雲信但伊丹元忠の孫
子言石 神尾市兵衛元壽
後傳有也

享保十三年付是日隅田川へ遊遊し
多の形遠的なる村に後行して
あま好せりふくく二本村を警
享保十三年十月廿日臨村に後行
明の十二日官軍に召されて其令に
従ふ
享保十三年三月廿日官軍に召されて

流福子の村と書

日永正月廿三日瑞村法後寺より
法永寺より書きたる金の法永寺と揚る
享保十三年正月廿二日列館林城
引渡法用之令書きたる二月廿三日
黄金と揚る四月廿四日法永寺
日永十月廿八日瑞村法後寺より
宮中に書きたる黄金と揚る
享保十三年九月二日進物表
享保十三年二月廿七日中里少
瑞村法後寺より
享保十三年正月廿九日高島より

道達一より瑞村法永寺に
百五十三日法永寺と揚る

享保十八年正月廿八日瑞村法後寺
海美一と揚る

享保十九年二月廿五日瑞村法後寺
咽の廿二日宮中より書きたる黄金と揚る

享保十九年三月廿二日同との

享保十九年三月廿二日法後寺

日永三月十八日瑞村法後寺

享保二十一年正月廿二日瑞村法後寺

として書きたるの作あり日永八月

法永黄金と揚る二月廿二日

河く洋後記

元文三己年八月十日奉敵山内右衛門
造とて奉行と命とれ等の
切ありと六三月八日奉て左兵衛
兼色根臣作と傳つてきて其命に
時服とて揚

元文三己年十月十日上列雜林の
太田町とて石橋とてし出せり
とてし河内とてしとてし
仰りし日十月十日奉服と命と
揚り十月十日とて三月十日洋後
元文三己年二月八日洋後

宣保二己年八月十日奉敵山内
右衛門造とて奉行と命とれ等の
切ありと六三月八日奉て左兵衛
兼色根臣作と傳つてきて其命に
時服とて揚

日辛十月十日

後服の儀より一橋乃法籍(法樂)乃
法用と命とれ等の切ありと六三月
八日奉て左兵衛兼色根臣作と傳つ
てきて其命に時服とて揚

延享三己年二月十日以三月十日
奉て左兵衛兼色根臣作と傳つて
きて其命に時服とて揚

延享三己年四月十日奉て左兵衛
兼色根臣作と傳つてきて其命に
時服とて揚

すこぬ。酒宿も芳ねきとて五月
二日百もて何股三とて流る。

同奉九月七日朝鮮の信使來聘の
法用と大なりし也。

寛文元年六月十日朝鮮の聘
使の法用とてりしとて何股三と
流して別はぬ事にはさ方りしとて

英令に於て流る

同奉十月十日用院宮の娘文

卒宮若宮ありしとてりしとて其
春津速とありし法使しりき乃
作りし咽の已奉四月十日法服

英令に於て何股三とて流る三月春
物り其の洋獨しとる。

中宮若くしとてりしとて流るしりし
聖書流しとてりしとて法用とて流る
不ありしとて何股三とて流る。

寛文三年三月十日京都田川の
法乃法用とてりしとて九月十日の

こと切あきとてりしとて英令に於て何股三と流る
宝曆元年三月十日法令今乃
事ありしとてりしとてりしとてりし
ありしとてりしとてりしとてりし
三月十日の事とてりしとてりし。

日年六月廿三日

大御新様乃涉新葬御法廷の法用と
命せしむ七月二日公事より旨ありと
さうし時股ニと揚。

日年八月九日涉の法用と
命せしむと令せしむ。

宝曆二年九月廿日

日光院君の涉新葬御法廷の法用と
命せしむ十月十五日公事より旨し
めしむと時股ニと揚。

宝曆三年二月廿日涉の法用
と命せしむと仰り。

日年四月十八日高良奉行

日年七月廿八日涉服時股に御用と揚
し日新御作せしむと仰り奉り改

宝曆四年二月十日公事

日年四月廿日天主教を監すしむ
と仰り。

宝曆五年六月十日群衆合

日年四月廿八日元のころと舊地
ととらむと仰りてそのの高良
かしむ。

宝曆五年四月三日公事のころと
互列様御(温泉いふ)と仰り。

明和元年二月十日卒年八十一

享保九年十月九日

享保九年九月廿七日

中津組全田周防守

千早

水野夜左衛門元親

改親貞

本中津守改稱中津守

少時後組備川原改守元親

享保十二年三月某日

安永勢子と勢光

享保十二年八月廿日

元文二年九月晦日

享保九年十月九日

奉天馬ノ種ヲ養育シ

五初 山崎信但主事在任ノ事也

佛小世祖金田周防守祖 吉原若石兩公命種芳

元文三年十月十日奉地より申付

高直主事如之御事

延享三年四月廿五日老祥賜表令入高直忠臣御事也

宝曆五年九月廿二日元元御事也

享保九年十一月九日

享保七年七月廿日奉旨

濟中世祖金田園防舟祖

吉名西尾山守定光

高松守行次男忠成
出雲守祖松野八重孫守光

享保七年三月廿日奉旨中令清將陸八

左文四重年七月奉代下徳國番前郡

岩手村清用分より以て收り取

して口郡分を本山村郡村並本新田

廻原郡橋村に之を移す

元文六年七月廿日奉旨改二十口上湯

宝曆七年十一月廿日奉旨中務物奉行

日本三月八日布衣忌と名すれ

宝曆八年三月十日常より

とけますとて時服ニと為る

宝曆九年三月十日又曰一事

あり時服ニと為る

宝曆十年三月十日神代改臣

よなてハそ事無く方ととて

時服ニと為る曰三月十日

とて時服ニと為る

宝曆十二年三月十日

大御所様の御遺物の時服のものに扱ふ

よなとて時服ニと為る

宝曆十二年三月八日死に中絶

寛保九年十月九日

寛保九年十月十日

中山道全回周防守組

菅原久世彦左衛門廣慶

改三三三

三三三三三三三三三

菅原信組内長菅原宗子

寛保二年十月七日周防守組の川へ水災

少く菅原宗子と合さるる十月十日

水原兼全が時服二揚り十月十九日と

之と並下り荒川の防堤と修築す

是て明の嘉永二年四月に日吉山内守十三日

洋福一廿三日世及荒川の堤と精修す

とく菅原兼全と修す

宝曆四年六月廿八日 冲中世组与氏

日辛七月十八日布衣志と名を記す

宝曆十三年辛酉月五日死す中世系

享保九年辛酉九月九日

享保四年三月六日 曾

其後門政世系

中世系組由園下郎守其死

冲中世组金田周防守组 三喜名 柳原五郎政夫

内中係

政者系

元文四年辛酉七月七日 祥入去念志助支記

元文六年辛酉月日 教仕休残と云

延享元年辛酉月日 死す中世系

享保九辰年十月九日

享保二十二年三月七日卒

脚部信重子

小島信重子

河内性組金田周防守組 三辰 京都重次而篤侍

享保二十二年三月七日卒

足利信重子

享保二十二年五月九日死

享保九年辛酉七月十日

源氏政之忠臣

伊豆守源氏重隆

伊豆守源氏重隆

吉原峰尾御理貞延

後氏部

豊後守

同日自定々御表紙の如く申上候

若君の御方へ属せし外に御表紙の如

く申し候事御表紙の如く申し候

御表紙の如く候

享保十年辛酉七月初日迄

日辛酉七月十日有各事と免され

享保十年辛酉七月十日日光奉行

曰来八月廿五日御服美奈谷御殿と御
付日叙高野の事作しき事(其後)と改
て後志をく日先へあつらふてその
ゆきくハ云にいとくし

元文甲申年八月廿五日御服奉行
寛保元乙酉年三月廿九日卒

寛保十一年年二月廿日

京都町奉行志摩守之隆忠成

御小姓組金田周防守組 三音依小演九門非隆

後古名 改依爲

曰来三月廿六日御目七古名是也その
三音依之へ奉る

元文甲申年六月八日死甲乙家系

享保十二庚午二月廿日

法皇御所侍左和守忠上熟胤

御中世祖金田周防守組

三景依本多全膳栄文

後子二百名

享保十七子年七月廿日御所侍左和守忠上熟胤

の三景依本多全膳

寛保元年辛丑三月廿日死年八歳

享保十二年六月廿日

河内性祖金田周防守祖

西凡初世善政年命長祐養子

三傳曾我長吉而長祐

法三石

改又三石
日白守
長祐守

享保古圓年六月廿日濟月三石是也の

三傳傳返一奉る才然々而御業の事

と云ふ事

享保古圓年九月三日進物表

享保十二年分月廿日白吉の事

享保に候より其日の諸事の事

三浦肥後守並次は日しをぬきの右邊に
勤むるにいとく歎かすにまじり
法皇御前分の御形。あつて作す
あつてに

法皇御前豫乃々一書あつて都(いさぎ)
法皇御前(あつて)作すて明の十日夕
く(いさぎ)にけりあつて十日
當中(いさぎ)

法皇崩(いさぎ)あつて都(いさぎ)に
作す

享保二十九年十月三日 法使申
日辛十月十六日 布衣名と(いさぎ)

元文元年九月九日 龜井公平而
いさぎあつてあつて石列律和等
樞要の地あつて法皇御前(いさぎ)あつて
作す十月十日 法使申(いさぎ)あつて
明の二年 付十日 法皇御前(いさぎ)あつて
元文元年 二月十日 法皇御前(いさぎ)あつて
進言料と信(いさぎ)あつて進言料と信
日月あつて當中(いさぎ)あつてあつて
鳥將の対(いさぎ)あつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

元文元年 十月十日 法使申(いさぎ)あつて
同年 十月十日 法使申(いさぎ)あつて

揚子江自船身位ゆき九日向守と改

宣徳二年四月十日亥卯未と改

洋酒一岩年一と改

同年五月朔日卯辰未全板付船二

羽織と揚

宣徳二年二月朔日庚申洋酒一

廿四岩年一と改

同年九月朔日卯辰未全板付船二

羽織と揚の年三月未と改

同日彼船部大和守保貞実母れ給

ありしは此年日光と改

同年六月朔日神庫沖宝物の風入

清用と替り十一月日光と改

同年八月十日未と改

子年春と改

將軍家同一年三月環玉香と改

揚の日光と改

三月日光と改

同年八月十日未と改

有徳院殿抄事と改

三月日光と改

同年八月十日未と改

同年八月十日未と改

同年八月十日未と改

御宮と修業と進一御用と云々

~~~~~御殿と云々

延享元子年七月廿九日群衆合

明和旧美年四月十四日致仕

天明四年七月廿九日卒年三十一

享保二年五月廿五日

御膳奉行傳七郎兼明寄附人

御中世組全由園防中組三喜保松平右衛門他兼道

改伊織

元文元年六月廿三日 歿死

享保十二未年六月廿日

拂方諸細戶取左門發海島

沖小住組全由周防守組

三音像 武清忠節茂廣

後景石

後左門

元文三年年十月廿日自臨目岩石是之

三音像より一奉り

宝曆七丑年四月廿日釋入全由之殿支記

日奉二月廿一日死守八奉



享保十七年八月十九日

御小姓組青山丹后守組

御書院若さま御座を相違及ふ迄奉り

三宮儀 山本大膳四方

後番三名奉

後 征伊予 雅徳

享保十七年三月廿七日御旨云々奉り

是等の三宮儀に返し奉り。

寛保二年六月廿日御小姓組より

同年十二月十八日布衣之と云々奉り

宝曆四年六月廿日奉り奉行

同年九月初日御座時殿に御座と云々

御小姓組御座と云々御座守と改

宝曆八寅年六月廿日於南都華严寺七条

享保十六戌年八月十九日

西尾清書院書圃并堂不舟池長尾馬自教養子

清中性祖青山丹波守祖 三右衛門西尾宗希女教養

改姓之由  
十五箇

享保二十卯年八月廿日有父方ぬきと流し

取の物付し色六邊跡と形寸

延享元年九月十九日群入大島忠臣節之記

宝曆三年三月八日教養

宝曆八年三月十三日元方一筆

享保十二年三月廿日

享保九年八月廿日

新八郎定忠

小菅傳但青木維友助

御中 榎組青木後守組 于右 前田 救馬定宣

政諸公

享保十八年三月廿日死

享保十六年二月廿日

享保十四年十月廿日

赤松組青山丹後守組 子右 長谷川玄師長師

享保二十一年十月十九日

時辰二と揚る

元文元年十月十日

元文二年十月廿日



清後有之 湯和之と湯。  
 元文四十年二月廿日首高面(放)置せ  
 させり 湯和志鷹一羽射るに古里  
 百五にて湯和之と湯。作とハ中務  
 左衛門忠良朝臣傳つた  
 元文四十年十月廿日之湯和也  
 湯和之と湯。湯和之と湯。  
 延喜四十年二月廿日又ハ事有之  
 湯和之と湯。湯和之と湯。

寛延三年九月廿日死 年三十一

享保十六年三月廿日

享保九年正月廿日在日分和

伊予州組青山渡守組

室賀 室賀美富山使  
後之御儀

室賀美富山使之男  
小室信祖福清左衛門次郎

享保十九年正月九日進物番

享保二十年四月廿日在日分和

年毎日少かりぬ 取のてく 宿事あり  
かゝる

元文二年正月廿日湯和部川所  
松平氏部上地 湯和部川所  
地とす

寛保二戊午年七月七日死 享年一某

寛保二戊午年九月十九日

河小姓組之由依後守組

小笠原信季行但馬守景之八景之

三景信 山景之而八景之

後守名

後守名 景之

元文二己未年七月八日之由依

同年三月廿五日海月名石之由依

之由依一奉る

延享二丑年十月廿八日諸國巡檢使と

令之しき三月廿九日山國の由依と巡る

及之由依と名あり明の由依年四月廿日

法服美令好時辰三時歳と稱し二月廿日

五と三十七日付の御付り八月洋稿  
延喜三宮年十月十七日附代かきりし  
所来を物敷ありし事務く整りて  
時股ニと稿。

宝曆元申年四月十日御使書

同年付七日陸府より御付りて  
きさりの御有同月より御服甚令  
二時股ニと稿了立日迄と三十月  
上日御りて御付稿す

同年十月十八日布衣志と免され

宝曆二申年十月十日相別後倉鶴屋  
八幡の社終きりし御用御月と命

とくき明の百幸二月十八日御服甚令  
二時股ニと稿了立日迄と三十月迄と  
三九月迄と三十月迄と三十月迄と  
三十月迄と三十月迄と三十月迄と  
御用御月と命  
七と稿。

宝曆元申年十月十日御使書

宝曆元申年十月十日御使書  
と三十月迄と三十月迄と三十月迄と  
同年十月十七日御付りてと三十月迄  
勢りし御付り

宝曆八年八月十八日幸長春以  
同年九月十日有河原時服日服之湯皆  
初身佛也也世世不事之改

宝曆十三年六月朔日幸中幸て洋  
福一之徳解深事と云

同年九月十日有河原時服日服之湯  
明和二年七月廿五日幸中幸て洋

福一之徳解深事と云  
同年七月朔日有河原時服日服之湯

明和三年二月廿日有河原時服日服之湯  
系之うあき候と云河原の光映山  
連長年よあつと云

享保二十九年九月十九日

日之奉行豊後守貞延親

河原組之由依後守組 三信 峰之内也貞聴

後七名 改修理

寛保元年六月二日有河原時服日服之湯

三信 依り一奉り

寛延三年六月八日有河原時服日服之湯

宝曆九年六月廿八日有河原時服日服之湯

明和七年二月十九日死

享保二十九年九月十九日

山田奉行對馬守並知悉

所出組戶田依後守組 三石依 堀豊次郎由良

後八右衛門

寛延元年七月十日 御名 死

享保二十九年九月十九日

河内性組之由後守組

河内守改修後守組持産書願

言儀 中室系 織部持質

改修

後守

日辛巳月廿日大納の式市後守の廿日  
百五十五石時股ニと揚る

元文元年辛巳月廿八日大納市後守  
村に列し時股ニと揚る

元文二己年二月廿九日山里にて百石  
納の村に列し百中明の海日西  
百五十五石と揚る

元文二己年十二月廿三日 任 西丸市川御所

曰日布衣志と云ふ事

元文二己年十二月廿三日 西丸の御所

寛保二己年十二月十八日 叙官内侍出立

後守とある

寛保三己年二月十二日 御所より

候へて白雁村名曰月十七日 御所より

正さきて時服と云ふ事

延享二己年九月十九日

後明院殿乃御所

寛延三己年春末春更あて 御所より

始と云ふ事 九月廿三日 御所より

令と云ふ事 明の事 四月十三日 御所より

陽始ゆらく時服と云ふ事 曰十九日

別の作有て更更より 陽始の事より

分りりとして時服と云ふ事

宝曆元己年四月十三日 任 後院

同年十月六日 任 二己年

享保二十九年九月九日

所先施取相是公更方喬養子

沖中姓組太田儀後守組

三原朝國 常需與片

後守守子名

後守更

宝曆元年壬午十月廿日海月之百五子名

是上の三守係の以下一奉り

宝曆十二年壬午二月廿日沖中姓組守取

曰年三月十八日布衣老と免と色

宝曆十三年壬午八月廿九日死



享保二十九年九月十九日

御免御座候事

御中仕組之由依後守組

三官儀之由御座候事

後三官儀之由

元文三年奉十月廿七日御旨三官儀之由

是等の三官儀之由奉

延享二年奉十月廿七日御旨

曰奉十月廿七日御旨

延享二年奉十月廿七日御旨

三官儀之由

是等の由

寛延三年八月九日諸府内國々と  
令を以て九月五日御座敷に於て殿ニ  
御成を賜う十九日右老の首出く  
御用の事早う止る事と云ふ三月  
十日歸りし御座敷に於て一奉りし者  
淨徳寺

宝暦四年二月七日江別敷山口と  
御座敷に於て内御事と監守人との  
御座敷に於て御座敷に御座敷に  
若令御座敷に御座敷に御座敷に  
多し事と監守人の御座敷に  
ありて右明の事一四月四日云々

物りて御用の事と云ふ御座敷に  
三月十日御座敷に於て御座敷に  
御座敷に御座敷に御座敷に  
御座敷に御座敷に御座敷に

宝暦五年二月七日御座敷に  
日辛十月十日御座敷に御座敷に  
御座敷に御座敷に御座敷に

宝暦七年七月七日御座敷に  
宝暦七年二月五日御座敷に御座敷に  
宝暦七年二月五日御座敷に御座敷に

享保二十九年九月十九日

清先絶取七之番祐賢熱所

清小性胆戸田依凌守胆

三番常我織部祐弘

凌公首名

凌監物  
七番

寛保二四年七月二日跡目公首名許是也

乃三番依返一奉旨

宝曆十三年十二月廿日死守子兼

享保二十九年九月十九日

清水納戸法左馬頭家書

清水組之田後後守組 三原 福垣 九条 西喜

改元九市

寛保三年四月十八日 清水納戸

同年三月廿八日 有各名と免さる

延享二年九月廿日 西條(田後)

宝暦元年七月十日 一統御老等合

宝暦旧戌年八月廿日 病おろり

のりまき勅小提(りまき)にて

形とす(りまき)とす(りまき)とす(りまき)

世に  
安永三年九月十九日死す

